（別紙２）

論文審査の結果の要旨

土方　洋一（ひじかた　よういち）

本論文は、『源氏物語』における物語生成のダイナミズムを、テクスト論の方法によって解明することを試みたものである。

テクスト論は、1980 年代以降、国文学研究においても盛行した方法論であり、とりわけ源氏研究においては、それが活況を呈したといえる。しかしながら、テクスト論は、外来の新奇な理論の一時的な流行としてあったわけではない。当時、戦後の源氏研究の精緻な作品分析の集積がある飽和状態に達しており、作家がいわば全知全能の神のごとく作品世界に君臨し、読者はあたかも神意をうかがうかのように作者の意図を解読すべきものだとするそれまでの文学研究のありかたでは、なお掬いきれない豊かさ・複雑さをこの物語が孕んでいることを、多くの研究者が感じていたのであり、『源氏物語』という作品自体が、テクスト論的な読みを要請していたのだといえよう。

源氏研究にテクスト論を応用した多くの研究のなかで、土方氏の本論文は、その理論の明晰さと、禁欲的・自己限定的なその理論の適用の清潔さにおいて、とりわけ新鮮な感銘を与えるものといえる。その理論は、本論文の冒頭に明確に示されるように、基本的には、フェルディナン・ド・ソシュールの言語理論を物語に適用したもので、物語の出来事の連辞構造の中には、物語に顕在化された要素の深層に、それとは相異なる要素が範列的に重層して潜在しており、その範列的な要素の緊張的なせめぎ合いによってテクストが生成されるとする見方を基軸とする。

全体は、第Ⅰ部「生成するテクスト」、第Ⅱ部「読みのコード」、第Ⅲ部「語りの複層」の三部に構成された１５章より成るが、本論文を通して、いわゆる＜准拠＞として扱われてきたこの物語における史実の引用の問題、貴種流離譚といった話型の問題、あるいは神話的原型の問題など、従来個別的に論じられてきたさまざまな問題が、範列的な織物性（テクスチュアリテ）として統合的に捉えなおされており、この物語テクストの多義性が構造的に明らかにされたといえる。これは、土方氏のテクスト理論の最も豊かな成果として高く評価される点である。

一方、土方氏の物語生成のダイナミズム分析には、作家の主体的・創造的関与という側面が徹底的に排除されており、これはその理論的前提からして当然のこととはいえ、やはり不満は残る。一部の術語の使用法に疑義を感じさせる点もないではない。しかしながら、本論文は、『源氏物語』が一種近代的とも言えるような驚くべき高度な達成を遂げていながら、しかもなお近代の写実的な小説に向き合うような対し方ではけっして汲み尽くすことのできない作品であることを、随所で的確に浮かび上がらせており、最も良質なテクスト論として、今後の源氏研究にとって、大きな位置を占めるものと考える。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。